

## マレー鉄道食堂車の至福

もう30年にもなる。初めて鉄道を乗り継ぎ、途中下車を繰り返しながらマレー半島2,000kmをひとりで縦断してから、この人間臭い鉄道の虜になった。その後も単身で、また仲間たちと一緒に、実に6回に亘って北から南へマレー半島を走り抜けた。一方で、いま観光用に設計され、鉄道ファンの垂涎の的となっている「アジア・エクスプレス」が、高級感を振りまきながら走っている。だが、どうも土地の匂い、人々の心の通った交流、民衆の生活臭が感じられないのが、些か気に入らない。その点土臭い昔ながらの列車はいい。日差しの強い始発バンコック中央駅の喧騒と人込みに始まり、人間臭さぷんぷんの車内で土地の人々と過ごしていると、臨場感を身体全体で感じ旅の真髄に触れた気持ちになって、思わず心の底から快哉を叫びたくなるのだ。

バンコックからマレーシア領バターワースまでをタイ鉄道が、そこからシンガポールまでをマレー鉄道が運行している。バンコックを午後出発し、翌日午後ペナン島の対岸、バターワースに到着する。ここでペナン島へ渡りしばし休息（宿泊）をとり、夕刻の夜行列車で翌朝マレーシアの首都、クアラルンプールに入る。市内観光を楽しんだ後、翌朝首都を発ち最終目的地シンガポールへ向う。全行程を通して地形にあまり起伏がなく、自然の景観と変化は山岳地帯を除いてやや魅力に欠けるが、土臭い沿線に展開される庶民生活に触れ、珍しい光景を覗けるのが興味をそそる。遮断機を90度ずらし、線路を跨ぐ形になっている主客転倒ぶりや、信号所に自転車を持って来る鉄道係員や、水牛が線路内に立ち入り停車してしまった列車等、思いがけないハプニングに興味もつってくる。

ずっと乗り続けてもまる3日間の旅である。冷房が効くステンレス製のマレー鉄道新型車両も悪くはないが、やはりマホガニー塗りの重厚なタイ鉄道一等車両の方に捨てがたい味がある。退屈しのぎに土地の人々が集まる大衆的な食堂車へ出かけ、乗客と身振り手振りの会話でのんびりした時を過ごす。それにしても蒸し暑い。エアコンがなく、窓は思い切り開け放たれ生温かい風を取り入れるだけではなく、天井の扇風機もいまにも壊れんばかりにうなりをあげている。通じない言葉でチャーハンを注文する。辛子の利いたピクルスにスープがついている。チャーハンには、大きな目玉焼きがトッピングしてある。ついでに‘タイガービール’も頼む。つい生ぬるいビールのピッチがあがるが、タイのビールは米から醸造される。だから、日本のビールに比べてアルコール度が強い。いい気になって飲んでいる内に、いつの間にかほろ酔い機嫌になってきた。周囲を見回すと食堂車の客は、目玉焼きの上にケチャップをいっぱいかけ、口の周りを真っ赤にしてしゃべくっている。興味本位にやってきた車掌や、ウェイターやコックも手が空くと、閑をもてあまして会話に加わってきた。ひねもす話の尽きることがない。

長い列車にはいろんなタイプの車両が連結されている。冷房のない車内でもシャワー室

は設備されていて、泡だらけの男たちが扉の隙間から気さくに声をかける。

3カ国を縦断する車窓風景に大きな変化は見られないが、それでもよく見ていると少しずつ変化していくのに気がつく。タイ・マレーシア国境の町、パダン・ベサルを過ぎると道行く人々の服装に変化が表れる。女は白っぽい頭巾を被り、男はソンコ帽という円筒形の黒い帽子を被っている。仏教国から回教国へ入ったのだ。そう言えば、回教国の禁酒という戒律を頑固に守り、マレー鉄道食堂車では、アルコール類のサービスが一切ない。ウェイターに無理を言ったら、アルコール抜きビールがあると言う。「それを頼む」とオーダーしたが、‘ドクター・ペッパー’を薄めたような飲料で、「何だ？これがビールか？」と、とても飲めた代物ではない。

途中駅で線路を渡って寄って来る物売りの売り物も変わってくる。菓子類と染色したような怪しげな飲料水が、サトウキビと魚介類になり、焼き鳥とおこわに変わって、果物とおもちゃになる。初めて訪れた時には、マレーシアの豊富な木材積み出し中継駅ゲマスのプラットフォームに、牛とヤギの合いの子のような持ち主不明の家畜が寝そべっていて、駅員と土地の人々に可愛がられ、駅のシンボリック的存在として育てられていた。それが、2年後に訪れた時には姿を見なかった。もう死んだと言われてがっかりした。

南下するにつれ、街のたたずまいが洒落た感じになり、車の往来が激しくなってくると、シンガポールももう間近い。ジョホールからコズウェイ（堤防）を渡って凱旋気分でシンガポールへ入ってくる。戦前派には、大東亜戦争当初の「シンガポール陥落」が懐かしいアクセスだ。ブキテマを通り市内の中心にある白亜のシンガポール駅にゆっくり滑り込んだ。疲労感と充実感の伴う長い旅ではあった。その晩、ニュートン・サーカスの屋台でまばゆいばかりの星空を見上げながら、満足感とともに串焼きサテーを味わっていると、先刻まで列車内で多くの人々と過ごし、楽しかった交流が走馬灯のように蘇ってきた。

(近藤節夫記)